

# 笠沙町におけるサツマノギク (*Dendranthema ornatum*) の分布及び生育環境について

立久井 昭 雄\*

Distribution and Habitat of *Dendranthema ornatum* in Kasasa-cho,  
Kagoshima Prefecture

Akio Tachikui

鹿児島県に自生しているキク属 (*Dendranthema*) は、オオシマノジギク、シマカンギク、ノジギク、サツマノギク、チョウセンノギクである。これらはチョウセンノギクが、大浦町磯間岳のごく限られた岩場に生息しているのを除けば、わりと広い分布域を示している。

筆者は平成2年度、県立博物館テーマ展「野ぎく展」(平成2年10月17日～11月11日)実施のため、キク科植物の資料収集を県内各地で行った。特にその中で、北緯32度以南の薩摩半島西海岸に分布が限られ、町花となっているサツマノギク (*D.ornatum*) に興味をもち、開花時期である平成2年11月3日から12月3日にかけて笠沙町での生育状況を調査したのでその一部を報告する。

## 1 分 布

笠沙町は、東シナ海に面した薩摩半島南西部に位置し、山地が直接海に迫った、リアス式海岸のため、海岸付近の傾斜が急で、岩肌がむぎだしになっている所が多い。道路は山の斜面を削ってつくられているが、サツマノギクはそのような斜面に生育している。また、平地が少ないため、耕作地が山の斜面に階段状に開かれており、畑の境や畦もまたサツマノギクの生育地となっている。

図1は笠沙町でのサツマノギクの分布を示したものである。大浦干拓から小浦、片浦、大当に至る海岸添いの道路は、山の斜面を削って造成したもので、サツマノギクは道路の斜面や階段状の耕作地に自生している。これらの地点の海拔は20m以下である。大当から小崎の道路添いは、高い所では100mあるが、自生の多い場所である。野間池では港の入口や半島中央部の道路の両側に見られる。また、立神を目前にする急崖にも自生している。野間池から平瀬に至る道路は、高い所で160mあるが、ここでもやはり道路脇の斜面に添って自生している。これらの自生地は、海拔数mから160mであるが、いずれも海岸線からの距離は500m以内である。海岸線から1500mほど離れている野間岳に向かう道路や、黒瀬で確認したが植栽と考えられる。

## 2 生育環境

サツマノギクは地下茎から地上茎を伸ばすが、地上茎は細く直立出来ないため、斜上ないしは下垂する。そのため、茎の高さは30～50cm程と小さく、背の高い植物によって光が遮られてしまうような場所には生育していない。背の高い植物が生育できにくい環境や、人の手によって、背の高い植物が切り払われてしまうような場所が自生地となっているようである。

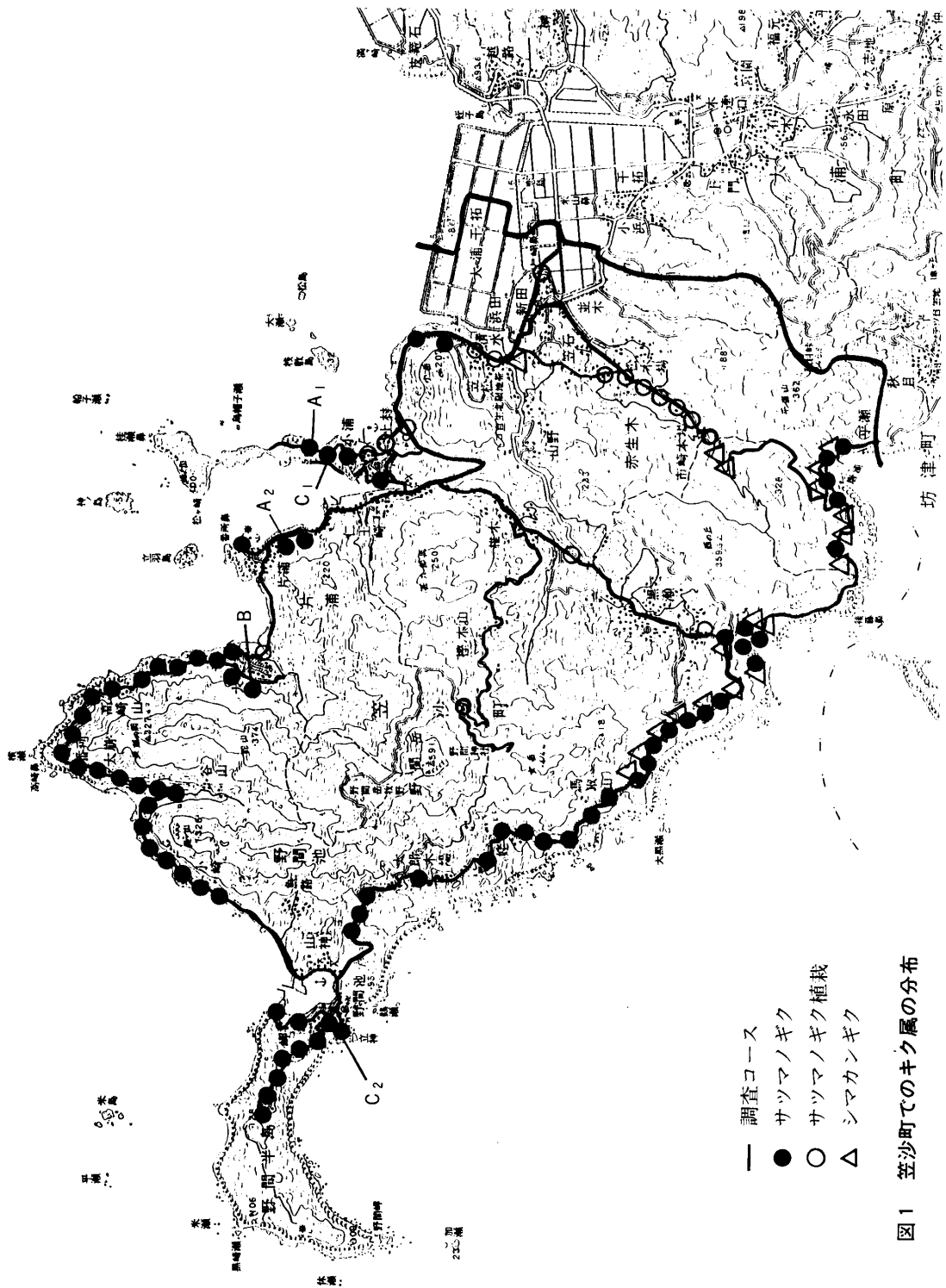


図1 笠沙町でのキク属の分布

自生地を大きく分けると次のようになる。A・Bは人の手が加わっている場所で、Cは自然の状態である。

### A. 道路をつくるために削り取った斜面及び道路脇

道路をつくるため、山が削られ斜面になっている場所はわりと多いが、サツマノギクの生育している斜面は限られている。表土が少なく、乾燥が激しく、土のもろい斜面に生育している。また、道路のすぐ脇は人によって定期的に切り払われている。

### B. 斜面耕作地の畦や段々畑の境

ここも人の手が入る場所である。とくに段々畑の境は、石を積んであることが多く、他の植物にとって良い環境ではない。

### C. 海岸の崖

岩はだがむきだしになった急崖で、海からの風も強く多くの植物にとっては生存できない場所である。

次にそれぞれの生育地タイプを示す。

#### A<sub>1</sub>……小浦道路脇

木本——カンコノキ、ネズミモチ、イヌビワ、トベラ、オオイタビ、ギボウシノ、ハマヒサカキ、マルバグミ、リュウキュウバライチゴ、ノイバラ、シャリンバイ、テイカカズラ、ヤブツバキ

草本——ヨメナ、ツワブキ、ヤブソテツ、ススキ、ヨモギ、アキノノゲシ、アキノキリンソウ、ホシダ、センニンソウ、タマシダ、ヤマハッカ、チカラシバ、ササガヤ、シマヒヨドリ、ナワシロイチゴ、ハマサルトリイバラ

海からの風が強いため、ツバキやハマヒサカキは4mほどであり高い。道路と畑に挟まれているため、のびすぎる枝は人によって切られている。サツマノギクはこれらの樹木と道路の間の

日当たりのよいところで

生育している。他の草本

類も多いが、成長すると

人の手が入るため、萌芽

力の強いサツマノギクに

ってはたいした障害と

はなっていないものと考え

られる。人手が加わら

なくなると、ススキ、ギ

ボウシノ、テイカカズラ

などの背の高い植物に覆

われ、サツマノギクは消

滅していくものと考えら

れる。

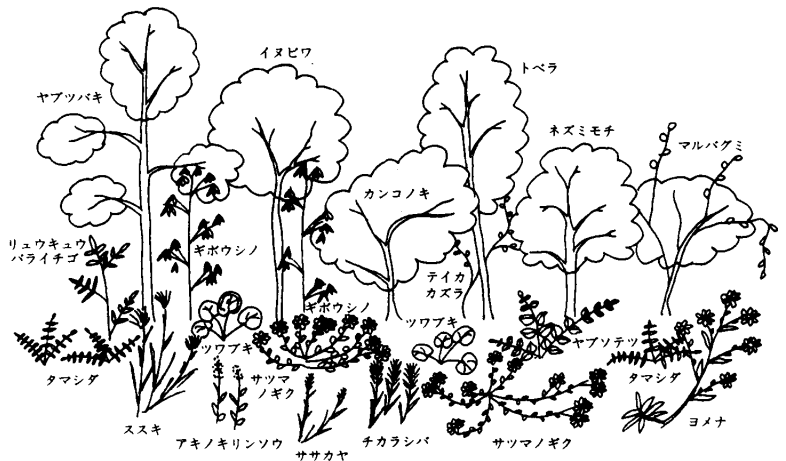


図2 小浦道路脇 (A<sub>1</sub>) の群落図

A<sub>2</sub>……片浦道路の斜面

木本——ネムノキ、クロマツ、トベラ、アキグミ、ハゼノキ

草本——オイランアザミ、ススキ、ギボウシノ、クマタケラン、ツワブキ、オニヤブソテツ、カラムシ、ツルソバ、カタバミ、チヂミザサ

道路を通すために山の斜面が削り取られている。表層は風化のすすんだもろい岩石からなっており、植物の生育にとっては厳しい環境の場所である。A<sub>1</sub>に比べると生育している植物の種類はかなり少ない。草本も背の低い種が多く、大きくなるススキも貧弱である。よい環境とはいえないが、光はよく当たる場所である。

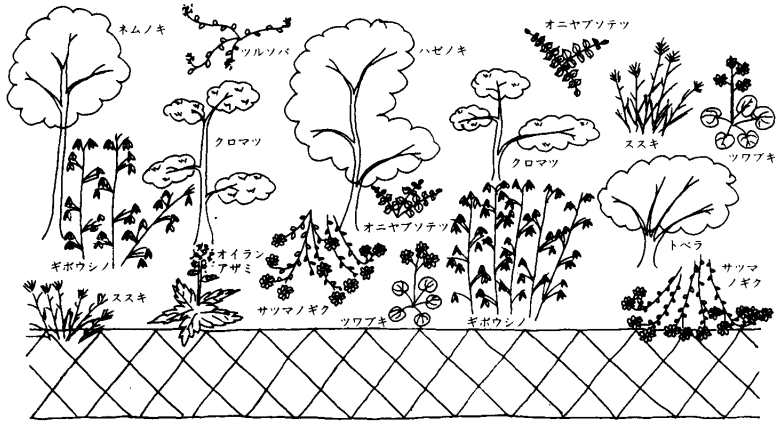


図3 片浦道路脇 (A<sub>2</sub>) の群落図

B……大当斜面耕作地の上下境

木本——イヌビワ、オオイタビ、マルバウツギ、ツルウメモドキ

草本——ススキ、ハスノハカズラ、カラスウリ、タマシダ、ツルソバ、カニクサ、ススキ、オニヤブソテツ、イシカグマ、ツワブキ

山のゆるやかな斜面を切り開いた耕作地である。上下の畑の境は、崩土を防止するため自然石が積まれている。植物は石と石のすきまに根をおろし、茎葉を広げている。積まれた石がきは垂直に近いので、大きな木本は見られない。乾燥に強いススキ、カタバミ、オニヤブソテツなどが生育しているが、成長は良くない。サツマノギクは石の間から多くの茎を出し、生育状態も良い。

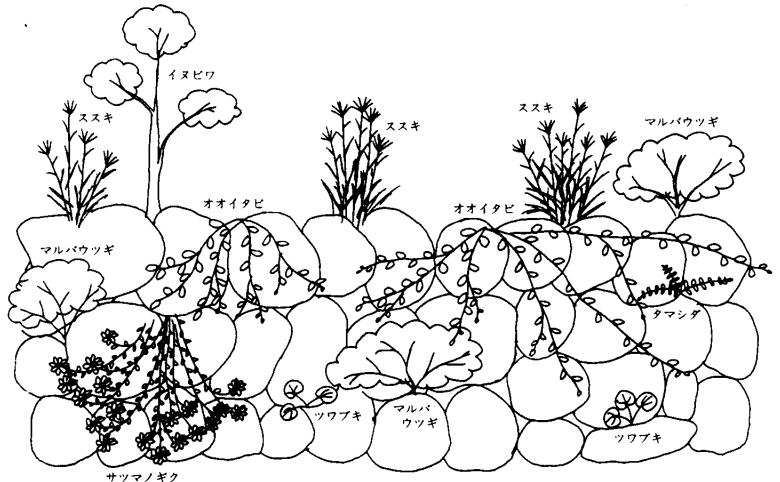


図4 大当斜面耕作地 (B) の群落図

C<sub>1</sub>……小浦海岸の崖

木本——センダン、トベラ、ハゼノキ、マサキ、ハマビワ、マルバグミ、ハマヒサカキ

草本——ギボウシノ、ヤマカモジグサ、リュウキュウヤブラン、ホソバワダン、ボタンボウフウ、

オニヤブマオ、オイランアザミ、ススキ、ヒメハマナデシコ、ニオウヤブマオ、ツワブキ

入江に面した海岸の崖である。斜面の中腹までは、トベラやマサキなどの海岸性木本がうっそうと茂っている。その下は大きな岩がむき出しになっている。樹木と崖の境目や崖下にはわりと草本が見られるが、崖の部分にはサツマノギク、ボタンボウフウ、ヒメハマナデシコと生育種は非常に少ない。ここも、海からの強い風、少ない土、乾燥など植物にとっての生育条件は厳しいものである。

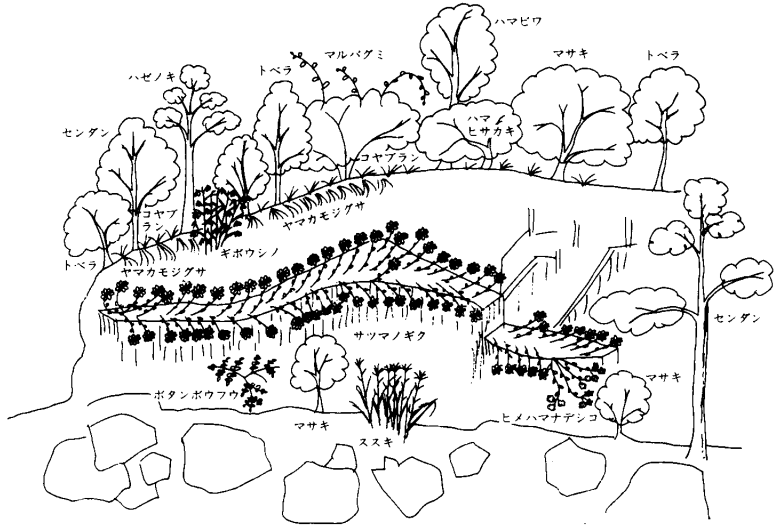


図5 小浦海岸 (C<sub>1</sub>) の群落図

C<sub>2</sub>……野間池海岸の崖

木本——シャリンバイ、トベラ、マルバグミ

草本——ススキ、ソナレノギク、ボタンボウフウ、グンバイヒルガオ、ニオウヤブマオ

東シナ海に面した垂直にちかい崖である。崖の頂上付近だけシャリンバイなどの木本があり、他は岩肌が露出していてあまり植物は見られない。厳しい環境ではあるが、競争相手の少ないこの場所で、サツマノギクは岩間にしっかり根をおろしている。

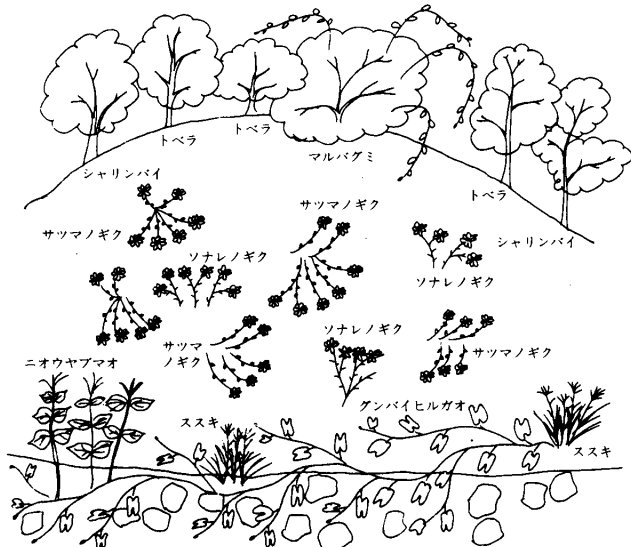


図6 野間池海岸 (C<sub>2</sub>) の群落図

以上、見てきたように、

サツマノギクの生育場所ABCでの種組成を比較してみると、木本はマルバウツギ、草本はタマシダ、オニヤブマオ、ススキ、ツワブキが主として混生している。これらの種の共通点として、①多年草で地上部を切られても萌芽力がある ②根群が発達していて乾燥に強い ③茎の高さや葉の

大きさを変えるなど厳しい環境に適應できる ④種子が風によって広範囲に散布されるなどがあげられる。これらの共通点はサツマノギクの特徴でもある。人の手が入ったり、自然環境の厳しい場所のため大きな集団を作れないことが共存していける要因になっていると考えられる。

### 3 シマカンギクとの関係

鹿児島県内に自生しているキク属で、分布域の広い種はサツマノギク、ノジギク、シマカンギクの3種であるが、笠沙町内での調査においてはノジギクは確認できなかった。図1にシマカンギク (*D.indicum*) の調査結果を示したがサツマノギクに比べ自生地域は狭く、清水・馬取山を結ぶ線より北には自生していない。黒瀬海岸付近と唐浜付近ではかなりの密度で自生し、サツマノギクと共存している。清水・唐浜を結ぶ線より北の方へなぜ分布が広がらないのか興味深い。それに、サツマノギクは海岸線沿いに自生しているが、シマカンギクは海岸線から1km離れた市崎木場にも自生を確認した。今後野間岳を中心とした地域の調査を深める必要がある。サツマノギクとシマカンギクの共存地帯で、サツマノギクとシマカンギクの雑種ではないかと考えられる個体を1株確認した。この個体は花の色が薄い黄色で、葉裏の毛が少なく葉の大きさや切れ込みは両種の間を呈している。今後染色体の調査を実施するなど解明していきたい。

### 4 まとめ

今回の調査は、笠沙町に限定して行ったので、サツマノギクについてのごく一部の解明でしかない。サツマノギクの急崖での自生は、小浦、片浦、野間池で調査した限りでは案外少ない。今後さらに調査を進めていくつもりである。

- (1) サツマノギクが海岸の急崖に自生している場所は予想に反して少なかった。大当・小崎間、太郎木場・黒瀬間は海岸まで急崖になっているため、調査ができなかった。小浦・片浦・野間池で調査したかぎりにおいては、ホソバワダン、ツワブキ、キダチハマグルマの群落は随所にあったが、サツマノギクの自生は少なかった。環境が厳しく、他の植物が侵入できないような場所がサツマノギクの自生地となっている。海岸線での調査地点を増やし、急崖での自生条件をさらに解明していきたい。
- (2) 自生のもっとも多いのは道路脇の斜面であり、生育状態も良い。これらの場所は人の手によって自然が作りかえられている。土を削り取っているため岩がむき出しになっている場所が多い。
- (3) 耕作地の畦や道路脇など人の手によって植物が切り払われる場所にもよく見られる。これらの場所は、他の植物にとっても生育条件が良いため種組成は豊かである。しかし人の手によって植物の高さが制限されるため、萌芽力の弱い種は成長できない。サツマノギクにとってはかっこうの場所である。図1に示した道路沿いの分布の多くは、人の手によって広げられたと考えてよいのではなかろうか。

### 5 参考文献

- ・初島 住彦, 1986. 改訂鹿児島県植物目録: 169-170
- ・下斗米 直昌, 本邦産菊属野生種の分布について〔1〕: 899-909
- ・宮脇 昭・奥田 重俊, 1990. 日本植物群落図説: 354. 至文堂
- ・佐竹 義輔, 1981. 日本の野生植物III (III) 164-167. 平凡社